

高橋竹之介と北越治水策

はじめに－高橋竹之介33回忌－



高橋竹之介

昭和17年（1942） 長岡千手町の真照寺で竹之介の
33回忌が行われる。
大竹貫一・頭山満らの大物が参列。

大竹貫一：政治家・地方名望家。
中之島の庄屋の家に生まれる。長善館で学んだ後、
治水の必要性を痛感し、土木工学を学ぶ。のち衆
議院議員に当選、34年10か月衆議院議員を務め、
信濃川の治水を訴える。

頭山満： 国家主義活動家。
福岡藩士の三男。福岡藩の勤皇派の塾で学ぶ。
秋月の乱、萩の乱など士族の反乱に呼応し蜂起を
試みるが失敗、投獄される。出獄後、板垣退助の
影響で自由民権運動に参加。その後。政治結社、
玄洋社を組織、アジア主義に傾倒し、孫文らアジ
アの指導者を支援。
※右翼の巨頭としての評価も。

1、高橋竹之介略歴

天保13年（1842）

杉之森の庄屋の次男として誕生

与板の斎藤赤城の塾に学ぶ。

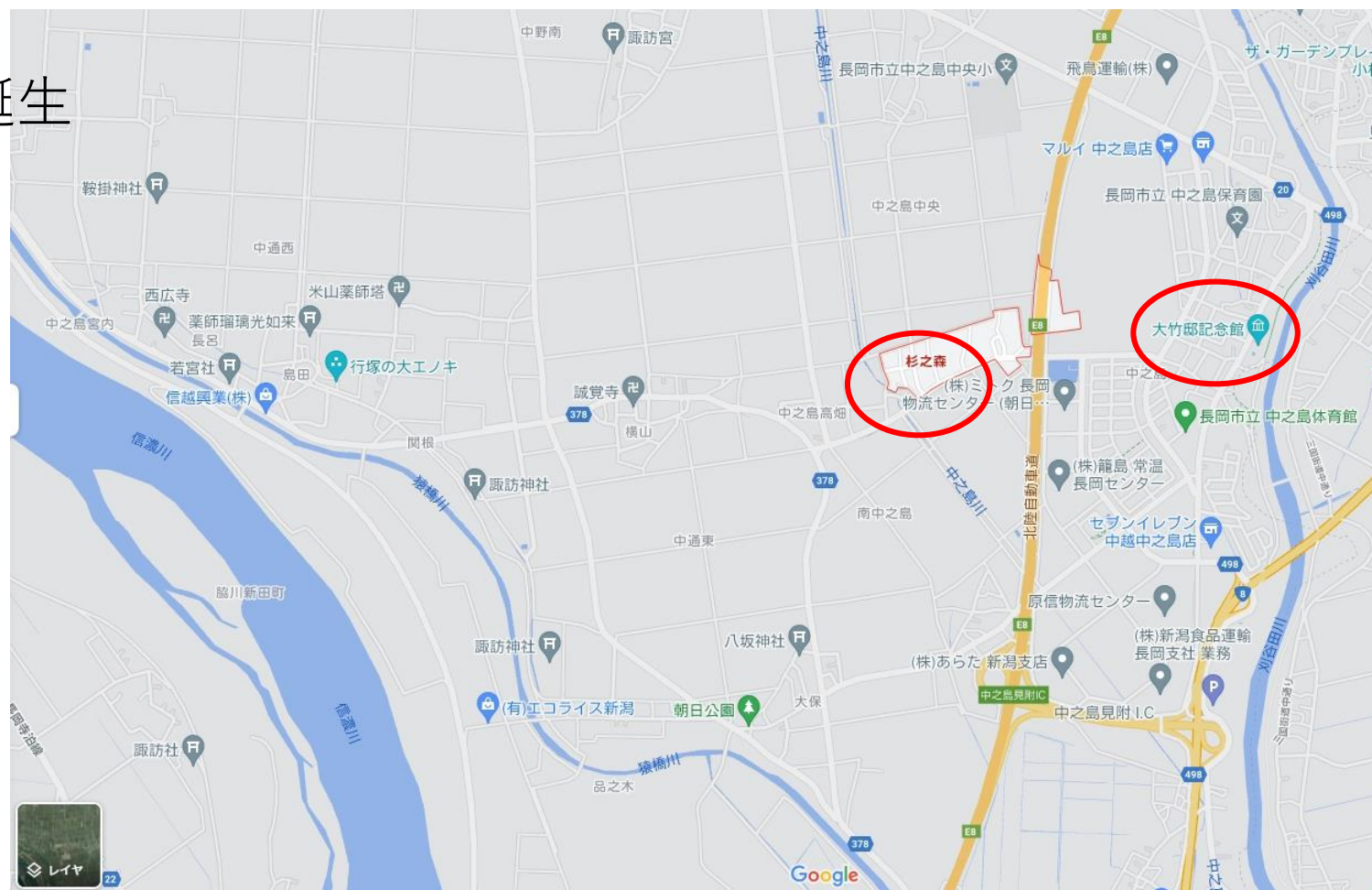
文久2年(1862)

長善館に学ぶ

文久3年(1863)

西国遊学に出発

湊川の楠木正成の墓前で
尊王を誓う



GoogleMapより作成

文久3年(1863) 7月27日

今町諏訪神社の祭礼の日、出立。京都を經由し西国へ遊学。
片貝一直江津—総持寺—金沢

8月17日 京都着 (翌日、8月18日の政変)

19日 京都発

22日 林田藩 (播磨国) 儒者・河野鉄兜に会う。
以後、森田節斎、日柳石燕らに師事。

元治元年(1864) 5月 禁門の変前の京都に戻る。

5月22日 京都を立ち越後へ帰る。

慶応2年(1866) 江戸へ 古賀謹一郎らに師事。

慶応3年(1867) 2月 郷里に戻る。

5月 東北へ。米沢藩に建白書を提出。

9月 居之隊結成。京都に上り澤家に出仕。

慶応4年(1868)1月 鳥羽・伏見の戦い

鎮撫使の使いとして越後へ

4月 大久保利通、廣沢真巨、大村益次郎らに越後の状況を報告

閏4月 雪峠の戦争に参加 各隊を導く

小千谷・柏崎の道を新政府軍に案内

5月 小千谷会談

榎峠・朝日山の戦いに参加

以後、本営に詰め、会津まで転戦

7月 長岡城落城

9月 会津若松城開城

10月 郷里に戻る

明治2年(1869) 東京遷都反対運動により謹慎

明治3年(1870) 1月 居之隊 東京へ召出され、第三遊軍隊として
東京の治安維持にあたる（竹之介は謹慎中）

3月 東京遷都反対運動に関連して逮捕

明治12年まで新潟監獄に収監 教育を志し、書を読んだという。

明治12年(1879) 出獄後、三条、郷里杉之森で漢学塾を開く
このころ頭山満が訪れる

明治14年(1881) 東京へ

明治16年(1883) 長岡に誠意塾を開く 弟子600人余

明治34年(1901) 閉塾

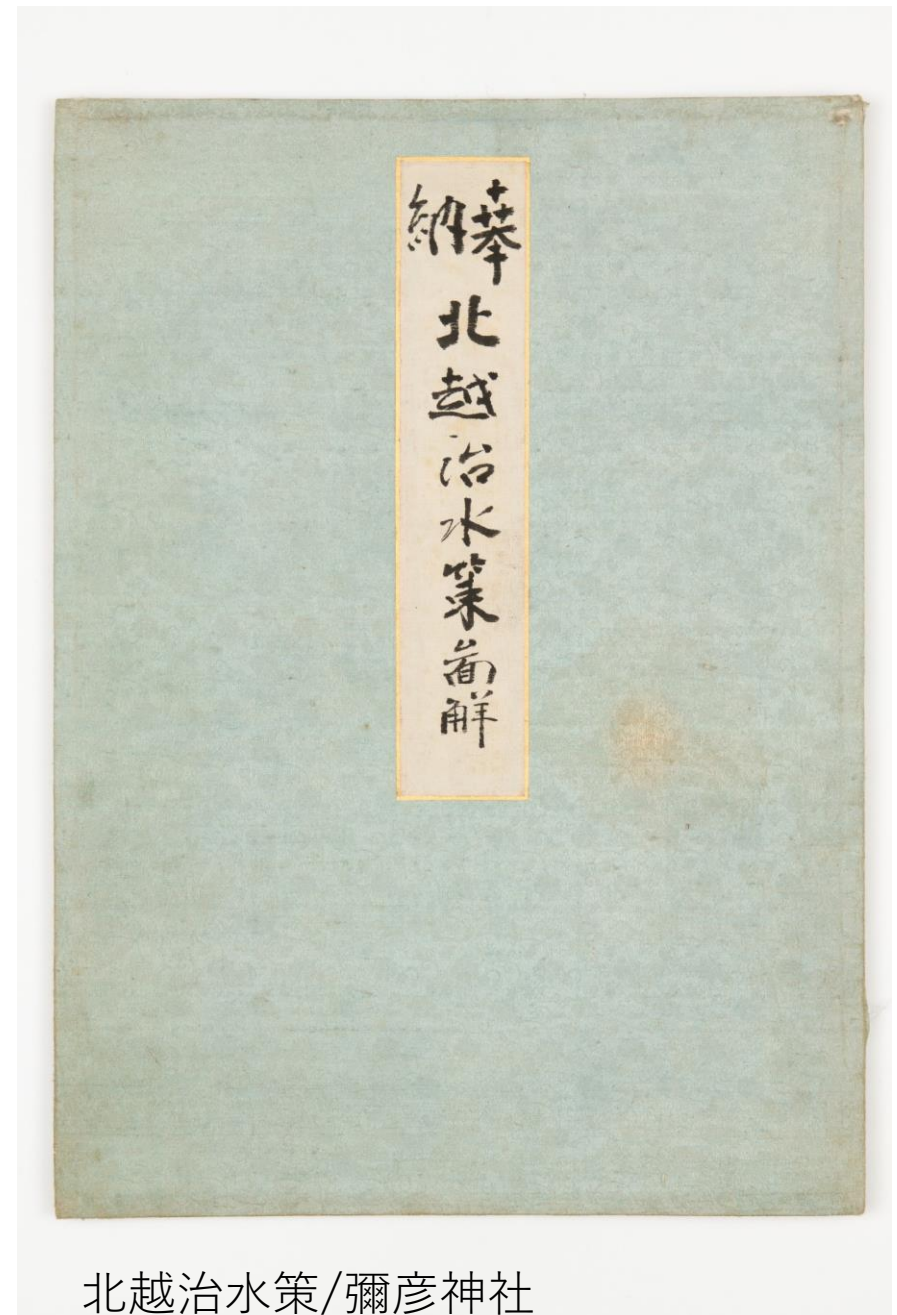
明治42年(1909) 没 69歳

2、竹之介の私塾・誠意塾

- ・ 明治14年 竹之介の上京後、開塾
- ・ 所在地：長岡 殿町 竹之介の私邸内
- ・ 入塾者：地方の資産家の子弟 のべ605人 多い時で200人以上
- ・ 教育内容：共同生活による人間形成
 - 素読による漢学（四書五経）
 - 論語・孟子などの輪読、竹之介の講義
 - 日本外史、資治通鑑などの輪講
 - 漢詩文・時事問題の論説
 - 放課後には撃剣など

3、北越治水策－大河津分水を建言－

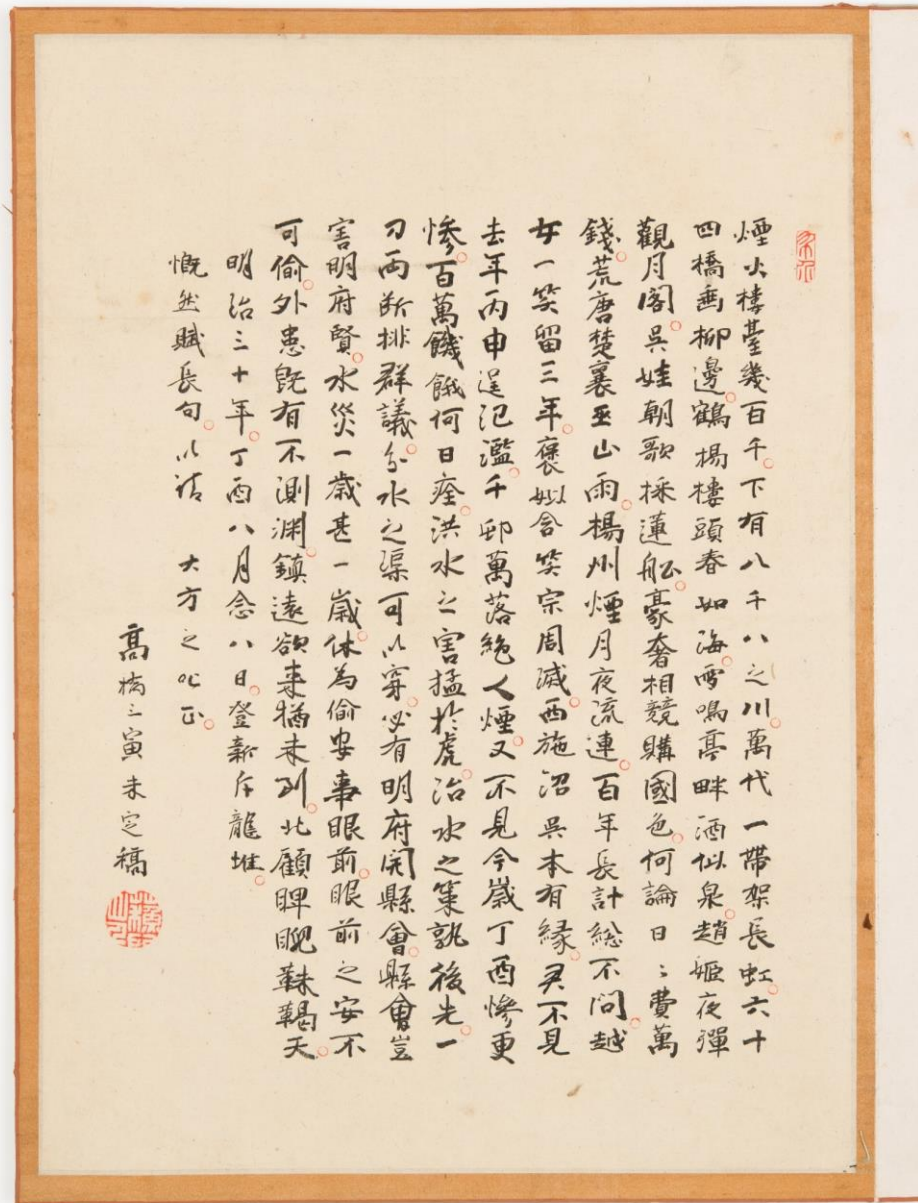
- ・ 明治30年(1897)に山縣有朋・松方正義に提出した建言書。
2部製作して、1部を弥彦神社に奉納。
前年、明治29年大洪水「横田切れ」。
30年も大洪水。
- ・ 根本的な解決として大河津分水が必要。



北越治水策/彌彦神社

- ・今、国内は贅沢を極めている。
- ・去年の洪水で千の村が水没し、人と炊事の烟が消えたのを見たであろう。
- ・今年の被害はさらにひどい。
- ・「洪水の害は虎よりも猛し」
- ・一時しのぎの策ではなく、治水の策を一刀両断し、分水を築くべきである。
- ・外患はすでに不測の事態である。猶予はない。

※田邊意訳



北越治水策

第一圖解

按康平三年古圖北越本一大海灣而以今古志郡藏玉為港口矣
聞越佐海中有飛島之群嶼一旦為海嘯之所崩潰激潮射入此灣
內後數百年溝口氏之移封於新費田也一以隄防新築為命四境
諸藩皆爭傲焉然而東有阿賀南有信濃是此二大川日夜送泥淤
輸沙礫者亦皆所以成就今日之蒲原沃野也然則所以古之致膏
腴者所以今之逞浸害而所以古之隄防是為命者所以今之既淪
是為急也康平距今殆八百年矣北越山河之變既已如斯變
通之道不講究而可乎哉今人徒守株拘泥所謂刻舟而求劍膠柱
而鼓瑟可謂誤謬之已甚者矣

中野城

中野城

第一圖

康平三年古圖
試寫其概畧



門下川上謹按

第一図 康平3年越後古図



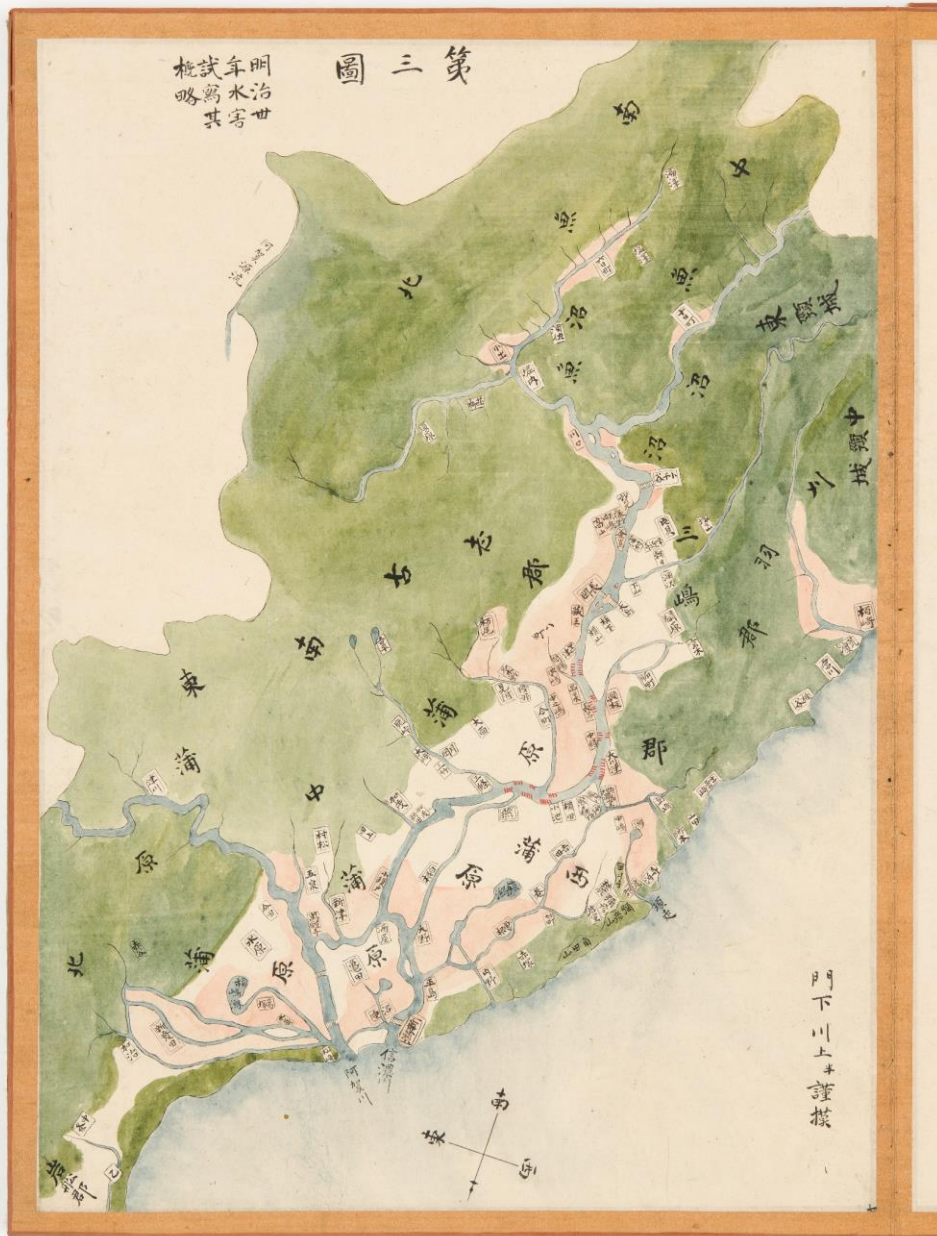
- 康平3年（1060）の古地図
- 北越はもともと海灣であり、古志郡蔵王（長岡市）が港口であった。
- 溝口家が新発田に封ぜられてい
以来、堤防を築き治水にあたってきた。諸藩もこれに倣った。これが現在の肥沃な土地の大本である。
- が、現在の水害の原因でもあり、必要に応じて検討しなおす必要がある。
- 康平の時代は今から800年以上昔である。臨機応変に変化することが大切である。

第二図 明治29年水害図



- 治水には水源の山林の管理が重要である。
- 近年は文明が開け、建築や鉄道などに木材が大量に消費されている。
- 信州は製糸産業が盛んで、木材が伐採され、水源が枯渇している。
- 堤防は増築しなくてはならない、河身は改修しなくてはならない、護岸は沈床しなくてはならない、治水の方法で怪しんでいることは粗朶工法（柴の柵を川底に沈める工法）である。これによって川底が高くなっている。
- オランダは海が高く、陸が低い。これを海が低い北越にあてはめようとしている。計画を変更すべきである。

第三図 明治30年水害図



- ・ 昨今の2年続けての水害は聞いたことがない。
- ・ 山林の乱伐と大雨によって洪水が発生するが、河川改修がうまくいっていない。
- ・ 粗朶を施設しているが各地で堤防が切れた。
- ・ 水は高いところから低いところへ流れる。粗朶は水を高いところにとどめるようなものである。去年は長岡で氾濫し、人民は枕を高くすることができなかった。
- ・ 今年、信濃川を上下する際、川の中に杭を打ち、木柵を立てているのを見た。
- ・ 水の流れをふさいでいるのは工事の弊害である。

第四図 大河津分水試案



- 大禹の治水は山に随って川をさらい、海に注ぐものであった。最近の氾濫は水を近くの海に注がないで、美田に放とうとしている。
- 明治初年の大河津分水の拳は中止されたが、大河津分水が実現すれば豊かな実りを得ることができる。
- 分水が実現すれば無数の堤防と同じように災いを逃れることができる。
- 反対するものは、分水が決壊すれば大きな被害が出るだろう、砂丘が障害となり難工事となるだろう、という。
- これは工事をならず者たちに行わせたため、機械化して行えば実現可能である。
- 年々洪水により1000万の損害がある。県債100万を10年間募集して工事をした方がよい。

第五図 北越治水試案



- 新潟は開港五港の一つであるが、土砂が堆積している。
- 松ヶ崎港を開こうとすれば反対にあい、大河津分水を実現しようとするれば妨げられる。龍島停車場に反対し逋信大臣に一喝された。
- 新潟は400年の歴史があり、その利益は7郡を潤し運輸、物価を支配している。利益を独占し、美人の巢窟で財貨を使い果たしている。新潟市民は狡賢い。
- しかし、巻菱湖、竹内式部らを輩出している。
- 新潟は四神相応の地であるが港口が閉塞して巨艦が停泊できない。
- 薩摩人の何某が新潟港の改築には平島に水路を作り信濃川の水を日本海に流し、湾内を浚渫すれば、良港になるという。賛成である。

第五図 北越治水試案



- 船の道にあるものを港、水流の会するところを湊という。湊には土砂の沈殿がおこる。港湾には沈殿がおこらない。長崎・函館・小樽・神戸・横浜がこれである。東京の隅田川、大阪の淀川は沈殿する。新潟の信濃川と同じである。
- 天下の形成は一変して、ロシアはシベリアを横断し鉄道を敷設し、フランス・ドイツと結んでウラジオから日本海に進出している。我が国はどのように対応すべきか。
- 東は函館から西は下関まで良港がない。七尾・敦賀・宮津・舞鶴では不足である。
- 新潟は良港であろうか。南は蒲原郡、東には奥羽二国が控える。清水峠に鉄道を敷設すれば関東までから京浜に出る。

第五図 北越治水試案



- 東洋の地図を検討するに、太平洋の水は八丈島から西に向かい、中国の東岸から北上、黄海、玄界灘から東流して日本海にはいり、津軽海峡から太平洋に還る。
- 丹波、丹後、但馬からウラジオに直行するのは乱流で航路としてよくない。
- 新潟より流れに乗って往復可能である。
- 新潟港の改築は北越治水の策だけではなく、天下の交通の対策である。
- まず、大河津分水で信濃川を海に注ぎ北越の大患を除き、新潟港を改築すべきである。
- 分水工事は何度も請願してきたが、封建時代で世の中が統一されていなかったため聞き入れられなかった。明治の今はそうではない。

※竹之介の主張

= 分水の実現と港湾の整備は一体として考えるべき、一体と考えることが可能

近世以来、信濃川等越後の河川改修には新潟湊との調整が不可欠。

- ・ 信濃川の水量が減ると河川水運が衰退し、港の機能が低下
藩への運上・冥加が減少

例)文化年間から鎧潟・田潟・大潟（三潟）の水を西川と立体交差させて

信濃川に排出（新川）する工事を実施＝西川・信濃川の流量を変えない。

⇒船舶が大型化した段階では水量をコントロールして土砂の沈殿を防ぐことが必要。そのために分水工事（大河津分水、関屋分水）が必要。

近世では新潟湊⇔流域地域の対立、近代では流域地域⇔それ以外の地域で県内で地域間対立がおこっていた。

⇒解消する理論

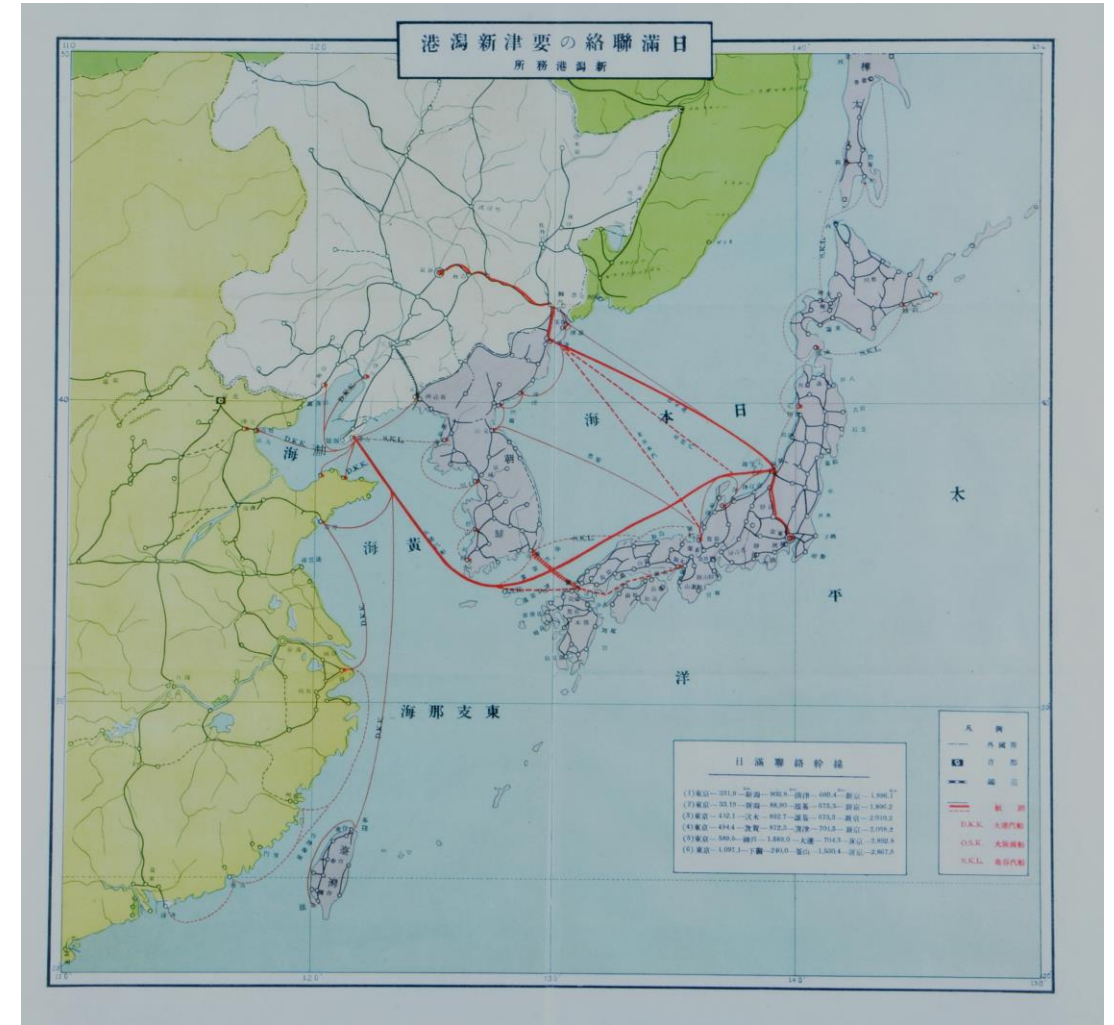
対ロシア・国権論…

= 日清戦争後、アジアへ進出しよう
とする日本と、三国干渉（明治28年）
で圧力を強めるロシアとの関係悪化に
伴い、日本海・日本海側の整備が必要。
上越線全通を見通す。

当時、対露硬派とされた大竹貫一、
頭山満（ともに対露同志会幹部）とも
親密

⇒ 日露戦争後、満州事変後の状況を
先読みしているような内容

分水だけでなく上越線全通の実現の請願
も同じような論理で行われる



新潟港務所発行『新潟港』附録
日滿連絡の要津新潟港（昭和13年）
/新潟県立歴史博物館

おわりにー竹之介の思想ー

- ・ 尊王思想 = 幕末には主流

明治維新後、近代国家樹立を
目指す新政府にとって行き過ぎた
尊王思想は危険な思想となる

→ 東京遷都反対、士族の反乱

⇒ 竹之介は教育に = 誠意塾

- ・ 在野の志士的な側面を色濃く残す

人との交流・実行力・国家的な視野

